

會し來れり。然るに當時其の標本は獨り大學に所藏せられざるのみならず、我が動物學者も從來更に注意せざりしものゆへ、三崎臨海實驗場の採集者に注意を促して兩三年を経過せり。然るに其の後明治二十六年頃、大學の採集家たる青木熊吉氏は遇々これを鈎獲して生きたる標本を大學に持參し、吾人動物學者をして喫驚せしめたり。

當時、予は東京帝室博物館の貝類標本の調査に着手せし際ゆへ、舊來紙包の儘にて物置の中に所藏せる標本中に、或は其の一個を發見し得べきこともあらんかと、搜索せしに果してこれを見出せり。其の附箋に大隅産と記せられしが、相摸灘に産することは確められしも、未だ西南の諸海に産するを聞かざりしが故に、予は大隅産とあるを疑ひ居れり。其の和名に就ても當時詮索を遂げず、其の價の不廉なるより大學の動物學教室にて稱へ始めたる長者貝を其の名稱とせり。其の後、予が一般貝類の和名を調査するにあたり、目八譜に載せられたる翁戎は、愈々此の長者貝に相當するを確むるを得たれば、爾來これをおきなえびす一名長者貝と稱するに至れり。

三崎沖に産するものは、唯一種のみなれども京都の平瀬與一郎氏は、土州の柏島沿海に數個を採集せられ、同氏は柏島産は三崎産と其の種類を異にし、而かも一種に止まらずして兩三種あるべしといへり。兎に角此の南海に産するの事實より察すれば夫の帝室博物館の古き標本に附記せる大隅の産地は強ち誤謬なきを證するに足るが如し。

因みに三崎に於けるおきなえびすの採集法及び産額、價格等に就て一言せん。最初、青木氏が獲たるものは這ひ繩に罹りたる由なり。這ひ繩は元來魚族を鈎獲する爲に用ひらるゝ漁具なるがおきなえびすは肉食性なるよりこれに掛かるものと察せらる。又死殻は章魚壺の中に往々發見せらるるといふ。青木氏の言に依れば、従前といへども屢々這ひ繩にかゝれるに相違なきも、無智の漁師は魚族の外何物にも眼を假さざるが故に、直ちにこれを取り捨てたるなるべし。獨りおきなえびすのみならず、相摸灘の名産たる階老同穴も又然りと、現在階老同穴を採集するには此の這ひ繩を用ひ、完全なる標本を獲るには是れ以外に適當の漁具なしと、至言といふべし。おきなえびすは、現今一年間に平均四五個を採集せられ、目下の相場は一個二十五圓にして其の多くは横濱にて動物標本を賣買する英人オーストン氏に引き取らるゝといへり。

さざなみに就て

岩川 教 授

さざなみは、普通の家鶏の一變種に過ぎざれども、本邦の特産として最も有名なり。東京帝室博物館に陳列せる六羽の剝製品中、二羽の雌は尋常の家鶏と更に異なる所なし。然れども、四羽の雄はいづれも極めて長き尾を有し、其の長さ短きも八尺、最も長きものに至りては實に一丈四尺六寸に達せり、眞に珍品といふべし。養鶏の術は、近來外國に於いて隆盛を極め、従つて生

たる變種多しといへども、其の目的は實用を主とする爲か、愛玩種は比較的發達せざるが如し。
さゞなみの如き稀有なる變種の外國に傳はらざりしは眞に奇といふべし。

本變種の和名に就て説をなすものあり、曰くさゞなみは羽色の俗稱にして元來本變種の通稱にあらざるべしと。依りて土州人につきて質せしに、現今同地方にては一般にこれををひきと稱し
さゞなみの名を聞かずといへり。古記録につきて調査せんとせしも、これを記するもの甚だ稀なり。唯、明治十二年博物局にて出版せる長尾鶏の圖譜に左の記事あり。著者は、田中房種氏にして校閲者は田中芳男氏なり。

長尾鶏は、其の初め土佐長岡郡篠原村より出づ、因てしのはらたうの名あり。天保年間高知に於て此鶏の飼養大に流行せり中略。長尾鶏のことは、從來書冊に載すること少し。唯安政六年秋刊行せる伊勢相可西村廣休氏の小品考に圖あり。曰く魏志、朝鮮有長尾鶏尾細而長三尺、同書馬韓國出細尾鶏其尾皆五尺餘。註に曰く土州にてさゞなみ又篠原たうと云ふ。又白き者あり、しらふぢと云ふ。其の尾垂れて銀藤に似たる故に名づくるなるべし云々、あるのみ。猶、田中房種氏これに附言して曰く、「土佐に一種さかはたうと云ふあり。高岡郡左川村より出づ、又一種たうてんかうと云ふあり、皆しのはらたうの別種にして形狀大抵相似たり」と。

又東京家禽雜誌社より出版せる家禽圖譜中に博物館の陳列品を撮影せるが如き圖を掲げ、こ

れに附記して曰く、長尾鶏の本邦に渡來せし年代は詳に知るべからずと雖も、昔時朝鮮國より同種を移し、改良を施したるものにして土佐及廣島地方に蕃殖す云々。

以上の記事より考ふるに、本變種は元と朝鮮より傳來せられたること疑ふべからず。さゞなみの名稱は、現今土佐にて通用せざるが如しといへども、前條小品考の記述に依れば、昔はしのはらたうの異名として長尾鶏の通稱とせられたるが如し。或は、當時飼養せられたる種類の羽色はいはゆるさゞなみなりしに因りて其の名出でたるか知るべからずと雖も、吾人は今日さゞなみなる名稱を以て長尾鶏の通稱にあらずと、これを否認すべき確證を有せざる以上は暫くこれに従ふの外なしと信するなり。

しのはらたう及びさかはたうに就て説を成すものあり、曰くたうは即ち黨なりと。其の昔、大名行列の伊達道具の中に大鳥毛と稱して長柄の鎗の穂先に家鶏の尾羽を束ねたるものあり。諸大名皆これを用ひたるが如しといへども、土州藩主の大鳥毛は長さ一丈餘に達し、壯觀を以て名ありしが、其の毛は即ちさゞなみの尾羽にして、藩主は年々配下の農民よりこれを徵集するを恆例となせり。然るに古來長尾鶏の飼養流行せる篠原村及び左川村にては各々組合を設けて、少しにても長き羽毛を藩主に獻納せんと互に競争せる結果、終に篠原黨左川黨の名出でたるなりと、首肯すべき説なるが如し。

又長尾鶏なる漢名に就て成すものあり、曰く長尾鶏は尋常の家鶏よりも尾羽の少しく長きみのひきの漢名にしてさなみに充用すべきものにあらざるべしと。然れども、動物の進化及び趨化性より考ふるに、長尾鶏は恐らくみのひき及びさなみの總名にして、彼のしらふちといひほうわうまるといひ、悉く其の變態と認むること穩當にあらざるなきか、記して以て後日の備考とす。

小笠原島旅行談(演説ノ要旨)

脇水 講師

余ハ去明治三十八年六月十五日ヨリ二十二日マデ小笠原島及ビ硫黄島方面ニ旅行セリ其目的ハ其前年十一月南硫黄島附近ニ噴出セシ新火山島ヲ視察スルニアリキ。

小笠原父島ハ横濱ヲ去ル海上五百三十海里南硫黄島ハ七百四十海里ニシテ父島横濱間ニハ毎月一回定期航海船ノ往復スルアリ而シテ毎年一回(大抵六月)航路ヲ硫黄島列島ニ延長スルヲ例トス余ノ新火山島ヲ視察セシモ此機會ヲ利用シタルナリキ。六月五日午後二時定期船兵庫丸ニ便乗シテ横濱ヲ出帆セシガ、八丈島附近黒潮ノ流ル、邊ハ稍浪立チタレドモ其他ハ凡テ穩カニ翌日午前六時八丈島神湊ニ着セリ。上陸シテ附近ヲ視察シ、午後六時再ビ此地ヲ發シ、翌日晝頃先年破裂シテ有名ナル鳥島ニ寄航シ、程ナク出帆シテ八日午後二時小笠原父島ノ二見港ニ投錨セリ。小笠原列島ハ大小二十四ヶノ島嶼ヨリ成リ、是等ハ三ヶノ群島ニ分タル、北ニアルヲ智島群島、中ナル

ヲ父島群島南ニアルヲ母島群島トス。三群島中父島ヲ最モ緊要ナルモノトス、是レ二見港ナル良港アルガ故ナリ。此灣ハ周回七里位ニシテ灣内水深ク三千乃至四千噸ノ大汽船モ優ニ入港シ得ルノミナラズ四方圍ラスニ高嶺ヲ以テスルヲ以テ灣内波穩ニシテ實ニ天與ノ良港ヲナシ將來我が國ノ南洋ニ向テ發展スル屈竟ノ足場タルノミナラズ軍事上ニ於テモ重要ノ地點タリ。現今ニ於テハ内地トノ間ニ海底電線ヲ通ズルモ其當時ハ是等ノ設備ナク、當時ハ恰モ露國バルチック艦隊東航ノ際ニテ或ハ小笠原ヲ襲フテ根據地トナスヤノ説ヲナスモノアリ、民心競々トシテ内地ノ音信ヲ鶴首眺望セシ折柄、我兵庫丸ハ日本海海戰大勝利ノ吉報ヲ島民ニ傳ヘンガ爲メニ殊更ニ滿艦飾ヲ施シ花火ヲ揚ゲ威風堂々トシテ入港セシカバ之ヲ見タル島民ノ狂喜ハ如何バカリゾ、爭テ端艇ヲ飛バシ獨木舟ヲ操リ兵庫丸ニ蟬集セリ。此時同乗ノ朝日新聞社員ハ大海戰捷報ノ號外數百枚ヲ撒散ラシテ戰勝ヲ報シタルハ時ニ取リテノ好處置ナリキ。是ニ於テ島民ノ喜ハ絶頂ニ達シ、翌日ハ本邦人モ歸化人モ皆共ニ提灯行列ヲナシ、大村小學校内ニテ一大祝捷會ヲ開キ、余等一行モ大ニ歡待ヲ受ケタリ。

父島ハ地勢、山多ク平地少ク、僅ノ平地モ常ニ海風ノ害ヲ被ルヲ以テ米ノ産ナキナリ。作物ハ僅ニさとうきび、甘藷、「バインアップル」、「バナ」、「等ニシテ、甘藷ハ味淡泊ニシテ島民ハ之ヲ常食トス果物ハ之ヲ内地ニ輸送ス味美ナリ。林木トシテハいちび、あかてつ、せんだん、あかう、やろう